

F8-01

「不登校やいじめ、暴力行為等を生まないための学校づくりに関わる校内研修パッケージの開発Ⅱ」に関する調査研究

研究の概要

平成26、27年度に、各学校が生徒指導に関する校内研修に容易に取り組むことができるよう、具体的な研修資料や手法を盛り込んだ五つの研修パッケージを開発した。学校における生徒指導は、問題行動の複雑化、家庭環境の多様化等に伴い、これまで以上に多角的な指導・支援が必要とされている。そこで、本研究では、児童生徒の言動の背景や心情を的確に捉え、適切に働きかける教職員一人一人の力量を高めるとともに、学校としての組織的生徒指導力の向上を目指し、新たな研修パッケージの開発を行った。

キーワード

生徒指導、校内研修、アセスメント力、コミュニケーション力、ファシリテーション力

目 次	
I 研究の目的…………… 1	IV 研究の成果と今後の課題…………… 8
II 研究の方法・経過…………… 2	1 校内研修パッケージⅡ実施1か月後の「生徒指導状況」の変化…………… 8
III 研究の内容…………… 2	2 校内研修パッケージⅡ実施1か月後の「生徒指導体制」の変化…………… 9
1 校内研修に関する実態調査 …… 2	3 生徒指導校内研修パッケージの効果的活用に向けて…………… 9
2 校内研修パッケージⅡの開発と構成…………… 4	4 生徒指導校内研修パッケージの課題…10
3 校内研修パッケージⅡの有効性の検討…………… 6	V おわりに……………10

岡山県総合教育センター

生徒指導部長 高山 公彦
指導主事 松浦 孝昭
指導主事 小賀 暁美
指導主事 赤木 陽一郎
指導主事 小林 寛
指導主事 小田 哲也
指導主事 青木 裕一郎
指導主事 山根 亮
指導主事 石原 亜純
指導主事 中舗 桂子

不登校やいじめ、暴力行為等を生まないための 学校づくりに関わる校内研修パッケージの開発Ⅱ

研究の背景と目的

不登校や問題行動等の減少には、事案への対応だけではなく、新たな不登校を生まない、問題行動が起りにくい学校づくりが必要である。全ての児童生徒にとって「居場所」があり、児童生徒の関わり合いを通して「絆」づくりを行うことができ、学習意欲や自己指導能力を高めていくことができる学校づくりは、不登校や問題行動等の未然防止につながる。しかし、日々の学校現場では、事案への対応に追われていたり、従来の生徒指導体制でよいという考えが根強かったりすることもあり、未然防止の取組が定着していない現状がある。さらには、生徒指導力を高めるために校内研修を実施しようとしても、研修の内容や方法の具体が分からなかったり、研修担当者に進行役としての不安があったりして、実施に至らないケースが多い。そこで、学校が生徒指導に関する校内研修に容易に取り組み、生徒指導力を高めることができるよう、具体的な研修資料や手法を盛り込んだ五つの研修パッケージ（以下「校内研修パッケージⅠ」という。）を開発し、広く県内各校にWebで提供した。（研究番号15-04参照。）

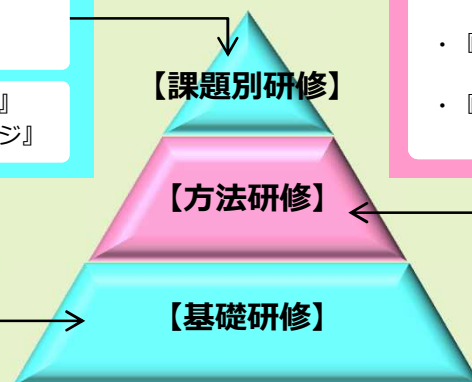
学校における生徒指導は、急激な社会変化を背景とする児童生徒の変容や問題行動の複雑化、さらには家庭環境の多様化にともない、これまで以上に多角的な指導・支援が必要とされている。より充実した指導・支援を行っていくためには、教職員が様々なケースで児童生徒の心情や背景を的確に捉えることが重要であり、教職員一人一人の生徒指導に関する力量形成や、学校としての組織的生徒指導力の向上が一層求められている。そこで、児童生徒の言動の背景や心情を的確に捉え、適切に働きかける教職員一人一人の力量を高めるとともに、学校としての問題解決的・予防的・開発的生徒指導の組織的な取組の充実を目指し、校内研修パッケージⅠの「基礎研修」と「課題別研修」をつなぐ位置付けともなる、「方法研修」の研修パッケージ（以下「校内研修パッケージⅡ」という。）を三つ開発し、広く県内各校に提供する。

平成26-27年度の研究 （校内研修パッケージⅠ）

- ・『いじめ防止パッケージ』
- ・『不登校防止パッケージ』
- ・『暴力行為防止パッケージ』
- ・『生徒指導「基礎」パッケージ』
- ・『生徒指導「進め方」パッケージ』

平成28-29年度の研究 （校内研修パッケージⅡ）

- ・『アセスメント力向上パッケージ
＜児童生徒理解＞』
- ・『コミュニケーション力向上パッケージ
＜児童生徒との信頼関係づくり＞』
- ・『ファシリテーション力向上パッケージ
＜学級（HR）集団づくりの促進＞』



主な研究内容

- 【平成28年度】＜研究委員会3回＞
- ・各校の喫緊の課題、研修ニーズの調査
- ・校内研修パッケージⅡ（試案）の開発
- 【平成29年度】＜研究委員会3回＞
- ・校内研修パッケージⅡ（試案）の試行（22回）
- ・校内研修パッケージⅡ（試案）の修正・改善
- ・校内研修パッケージⅡ完成、活用の検討

研究の成果

- ・グループ協議や演習を通して生徒指導の手法を学び合い、共通理解することのできる、研修パッケージを三つ開発した。
- ・教職員一人一人の生徒指導力の向上にとどまらず、学校としての生徒指導の組織的な取組の充実にも効果がある校内研修パッケージを開発した。

「不登校やいじめ、暴力行為等を生まないための学校づくりに 関わる校内研修パッケージの開発Ⅱ」に関する調査研究

I 研究の目的

岡山県総合教育センター（以下「当センター」という。）の平成26、27年度所員研究『「不登校やいじめ、暴力行為等を生まないための学校づくりに関わる校内研修パッケージの開発」に関する調査研究』では、各学校が主体的に生徒指導に関する校内研修に取り組むことができるように、多忙な業務の中でも短時間に実施でき、研修を企画・運営する研修担当者の負担を軽減することができる校内研修の在り方について検討した。特に、生徒指導の意義や、学校全体で行う生徒指導の進め方について共通理解したり、問題解決的な生徒指導のみならず、予防的・開発的な生徒指導の取組について協議をしたりすることで、教職員一人一人の生徒指導力を高め、学校としての組織的生徒指導力の向上を図ることを目指した。そこで、効果的な校内研修の実施方法、研修資料及びその活用方法を総合的に示す「不登校やいじめ、暴力行為等を生まないための学校づくりに関わる校内研修パッケージ」の開発を行った。平成28年2月には、「基礎研修」として二つ、「課題別研修」として三つ、合わせて五つの研修パッケージ（以下「校内研修パッケージⅠ」という。）をWebにて配信した。（表1）

表1 校内研修パッケージⅠのねらいと種類

	基礎研修	課題別研修
ねらい	『生徒指導提要』に示されている、生徒指導の意義を学び、一人一人の児童生徒の個性の発見や伸長、社会性の育成を目指す開発的生徒指導について理解を深め、共通理解に基づいた組織的な生徒指導の進め方について研修する。	進め方パッケージの内容を踏まえ、事例を用いたグループ協議を行い、生徒指導課題に対する組織的な対応について理解を深めるとともに、その課題を未然に防止する具体的な取組について共通理解を図る。
種類	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒指導「基礎」パッケージ ・生徒指導「進め方」パッケージ 	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめ防止パッケージ ・不登校防止パッケージ ・暴力行為防止パッケージ

『生徒指導提要』には、生徒指導の意義として、「生徒指導は、すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよい発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指しています。」¹⁾と示されている。学校における生徒指導は、急激な社会変化を背景とする児童生徒の変容や問題行動の複雑化、さらには家庭環境の多様化にともない、これまで以上に多角的な指導・支援が必要とされている。より充実した指導・支援を行っていくためには、教職員が様々なケースで児童生徒の心情や背景を的確に捉えることが重要であり、教職員一人一人の生徒指導に関する力量形成や、学校としての組織的生徒指導力の向上が求められて

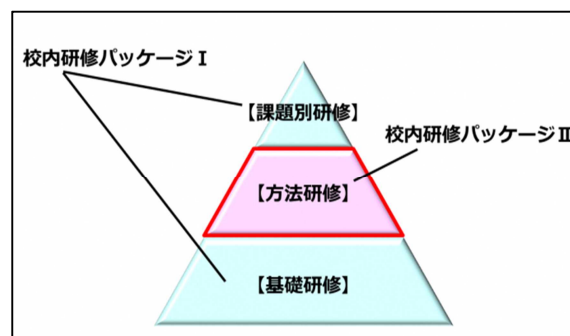


図1 生徒指導校内研修パッケージの全体構成

いる。

そこで、本研究においては、児童生徒の言動の背景や心情を的確に捉え、適切に働きかける教職員一人一人の力量を高めるとともに、学校としての問題解決的・予防的・開発的生徒指導の組織的な取組の充実を目指し、校内研修パッケージⅠの「基礎研修」と「課題別研修」をつなぐ位置付けともなる、「方法研修」（以下「校内研修パッケージⅡ」という。）の開発を行った。図1において、校内研修パッケージⅠ及び校内研修パッケージⅡ（以下「生徒指導校内研修パッケージ」という。）の全体構成を示す。

Ⅱ 研究の方法・経過

研究の流れを図2に示す。

平成28年度	研究の経過	協力校に依頼した内容	主な研究の内容
4月			
5月	アンケート（生徒指導担当者対象）		
6月	↓アンケート分析	研究委員会①（協力校） ⇒	聞き取りによる実態調査
7月	↑		
8月	構成・内容の検討		
9月	↑	研究委員会②（当センター） ⇒	指導助言者、協力校、生徒指導部参加 ・校内研修パッケージⅡ（試案）提示、意見交換など
10月	↓試案開発		
11月	↑		
12月	↑		
1月	↓試案修正	研究委員会③（当センター） ⇒	指導助言者、協力校、生徒指導部参加 ・校内研修パッケージⅡ（試案）提示、意見交換など
2月	↓		
3月	校内研修パッケージⅡ（試案）完成		
平成29年度			
4月	校内研修試行視察・分析	校内研修試行期間	
5月	↑	↑	
6月		研究委員会④（協力校） ⇒	協力校10校による校内研修パッケージⅡ（試案）を活用した校内研修の試行（22回）、実施後に研修担当者・受講者対象アンケート実施
7月			
8月	構成・内容の修正検討、有効性の検討	研究委員会⑤（当センター） ⇒	指導助言者、協力校、生徒指導部参加 ・校内研修実施後の分析、意見交換 など
9月	↑		
10月	↓	↓	
11月		研究委員会⑥（当センター） ⇒	指導助言者、協力校、生徒指導部参加 ・校内研修パッケージⅡ（案）提示、意見交換 ・生徒指導校内研修パッケージの実施時期検討 ・効果的な活用方法検討 など
12月	校内研修パッケージⅡ（案）完成		
1月	校内研修パッケージⅡ完成		
2月	Web配信		
3月	活用、支援準備		

図2 研究の流れ

Ⅲ 研究の内容

1 校内研修に関する実態調査

平成28年度に生徒指導担当者を対象に、生徒指導に関する校内研修についてアンケート調査（以下「生徒指導担当者調査」という。）を行い、校内研修パッケージⅡの研修テーマを探った。まず、「自校における生徒指導上の課題を解消するために必要な手法（スキル）」について、「児童生徒理解」「心理検査の読み取りと活用」「授業づくり（学び合い）」「同僚性向上」「教師のコミュニケーション力」「学級（HR）集団づくり」「教育相談」「ケース会議の進め方」「その他（自由記述）」から生徒指導担当者が選択（複数回答可）した回答をニーズの高い順に表2にまとめた。これらのテーマは、当センター生徒指導部の研修講座でも取り扱っている内容である。さらに、各校種とも、ニーズの高いものから順に10ポイント、9ポイント、8ポイント・・・とポイントを付け、各手法（スキル）の合計ポイントを表3にまとめた。

表2 自校における生徒指導上の課題を解消するために必要な手法（スキル）

ニーズ順 (ポイント)	小学校 (n=230)	中学校 (n=87)	高等学校 (n=84)	特別支援学校 (n=15)
1 (10)	児童生徒理解	児童生徒理解	児童生徒理解	児童生徒理解
2 (9)	学級（HR）集団づくり	学級（HR）集団づくり	教師のコミュニケーション力	教育相談
3 (8)	授業づくり（学び合い）	教師のコミュニケーション力	学級（HR）集団づくり	教師のコミュニケーション力
4 (7)	教師のコミュニケーション力	授業づくり（学び合い）	同僚性向上	授業づくり（学び合い）
5 (6)	同僚性向上	同僚性向上	教育相談	学級（HR）集団づくり
6 (5)	教育相談	教育相談	授業づくり（学び合い）	ケース会議の進め方
7 (4)	ケース会議の進め方	心理検査の読み取りと活用	心理検査の読み取りと活用	同僚性向上
8 (3)	心理検査の読み取りと活用	ケース会議の進め方	ケース会議の進め方	心理検査の読み取りと活用

※「その他（自由記述）」には、「リーダー育成」「保護者との関係づくり」「地域との連携」等の記述があったが、ごく少数だったため、参考意見として取り扱うこととした。

この調査結果から、生徒指導担当者は「児童生徒理解」「教師のコミュニケーション力」「学級（HR）集団づくり」が、生徒指導上の課題を解消する手法（スキル）として特に必要だと感じていることが分かった。この結果から、本研究では、これら三つのテーマを校内研修パッケージⅡで採り上げることにした。併せて、具体的なニーズを把握するために、生徒指導担当者調査の「自校の生徒指導上の課題は何か」の自由記述について検討した。

(1) 「児童生徒理解」

- ・問題行動を繰り返す児童の心情への理解（小）
- ・生徒指導の基礎（児童理解の仕方、共感的人間関係づくりの仕方）の習得（小）
- ・積極的な生徒指導の観点からの児童理解と教育相談の具体的な手法について研修不足（小）
- ・問題行動を起こす児童に、適切な指導、支援を行うことができていない（小）
- ・良好な人間関係を目指した学級づくりのための児童理解を深める校内研修の時間の確保（小）
- ・教員の観察眼、教育相談の力量、生徒理解の力量の不足（中）
- ・教員間で生徒理解の力量の差がある（高）
- ・障害特性を含めた生徒理解が不十分であり、生徒に安心感を与えられていない（特）
- ・生徒に寄り添い、指導できる（一人一人を大切に）教員の生徒指導力の向上（特）

表3に示されているように、「児童生徒理解」は最も課題意識が高いテーマであり、記述にも、児童生徒理解の力量不足に関することが課題として多く挙げられている。『生徒指導提要』には、「生徒指導はまず児童生徒理解から始まると言えるでしょう。」²⁾とあることから、「児童生徒理解」を深める校内研修は不可欠であると考えることができる。

(2) 「教師のコミュニケーション力」

- ・規律が身に付いていない、指導が入りにくい児童との信頼関係づくり（小）
- ・生徒の自己肯定感を高めていくための褒め方、叱り方の技術を高めていきたい（中）
- ・教師の願い、思いを生徒に伝える努力を続けること（中）
- ・カウンセリングマインドを伴った教育相談や生徒指導の方法を知らず、どう生徒に接してよいか分からない教員が増えてきている（高）
- ・全ての教員に生徒指導スキルをもって指導してほしいと考えているが、なかなか対話スキルや

表3 各手法（スキル）の合計ポイント

児童生徒理解	40
教師のコミュニケーション力	32
学級（HR）集団づくり	32
授業づくり（学び合い）	27
教育相談	25
同僚性向上	23
ケース会議の進め方	15
心理検査の読み取りと活用	14

カウンセリングスキルが身に付かない（高）

- ・不登校の未然防止のための、教師のコミュニケーション力（高）
- ・教師の資質向上として、生徒への具体的な言葉かけを考えていきたい（特）

児童生徒に対する教師のコミュニケーションに関する記述は、どの校種の生徒指導担当者からも課題として数多く挙げられていた。また、保護者とのコミュニケーションのとり方についても課題として挙げられており、教師のコミュニケーション力向上のための研修ニーズの高さがうかがわれた。『生徒指導提要』では、生徒指導の課題として、教師と児童生徒の信頼関係を育てることの必要性が述べられており、児童生徒との信頼関係を深めるための教職員のコミュニケーション力の向上を図ることは、極めて重要である。これらのことから、「教師のコミュニケーション力」を高める校内研修は、採り上げるテーマとして妥当であると考えられる。

(3) 「学級（HR）集団づくり」

- ・単学級で人間関係が固定化していることが課題（小）
- ・支え合う集団づくりを進めていくこと（小）
- ・学級の中で児童が安心できる居場所をつくること（小）
- ・教職員の取組の共通理解を図るための「集団づくり」や「学級経営」の研修の未実施（中）
- ・生徒にいかに自分たちで集会などを運営させられるかが課題（中）
- ・集団づくりが行事中心になりすぎている（中）
- ・学級づくり、生徒関係づくりのできない（スキルのない）若手の教員が多く存在する（高）

人間関係の固定化を指摘する記述内容が多く、子供たちの集団活動の活性化を図ることが大きな課題であることがうかがえた。また、若手の教員が学級（HR）集団づくりについて学ぶ場が必要だという課題も見えてきた。『生徒指導提要』では、生徒指導の課題として、児童生徒相互の好ましい人間関係を育てることの必要性が述べられており、教職員には、子供たちの集団での活動が円滑に行われるよう、適切に働きかけながら、学級（HR）集団づくりを促進する力が求められている。これらのことから、「学級（HR）集団づくり」の力量を高める校内研修を採り上げることは、妥当であると考えられる。

(1)～(3)より、校内研修パッケージⅡとして、「児童生徒理解」「教師のコミュニケーション力」「学級（HR）集団づくり」をテーマとして採り上げ、三つの研修パッケージの開発を進めることとした。

2 校内研修パッケージⅡの開発と構成

(1) 校内研修パッケージⅡの開発の方向性

生徒指導担当者調査の分析を踏まえた、生徒指導校内研修パッケージの全体像を図3に示す。

なお、開発に当たっては、校内研修パッケージⅠの「1回の研修時間は60分以内」「講義中心ではなく、協議や演習を通して学ぶ展開」というコンセプトを踏襲した。

次に、研修実施上のねらいや、そのための工夫について示す。

ア 校内研修パッケージⅡのセット内容

各研修パッケージは、「スライド資料（説明原稿）」「研修資料（提示資料）」「研修資料（配付資料）」「ワークシート」のセットから構成される。

イ 研修におけるグループ編成

生徒指導の知識や手法等について、教職員の力量を相互に高めるOJTとしての機能が働くよ

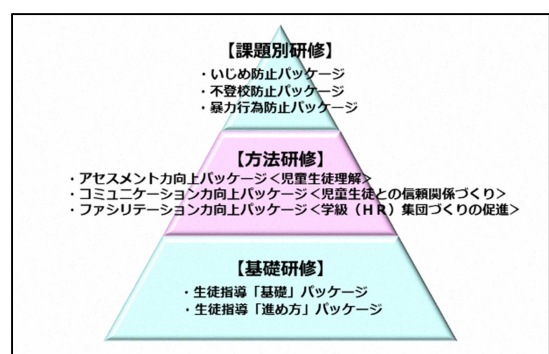


図3 生徒指導校内研修パッケージの全体像

うグループの構成を工夫し、年代やキャリアを越えて意見交流ができるようにする。さらに、アセスメント力向上パッケージとファシリテーション力向上パッケージは、実際の児童生徒の事例を扱うため、できるだけ共通の児童生徒をイメージできるグループを編成することが望ましい。

ウ 研修時間

60分を基本にするが、学校の実態により柔軟に実施する。

エ 研修時期と回数

生徒指導校内研修パッケージは、学校の実態に応じて適時実施できるが、推奨する実施パターンと時期を示すこととする。

なお、教職員の負担増加を避けるため、従来行っている会議の中に位置付けるなどの工夫をすることも考えられる。実施する校内研修のテーマは未定でも、年度当初から年間計画に入れて、実施時間を確保しておくことが望ましい。

オ 研修担当者への支援

- ・生徒指導校内研修パッケージの理解を深め、実施を促すリーフレットを作成する。
- ・生徒指導校内研修パッケージを容易に入手することができるよう、当センターのWebページからダウンロードできるようにする。
- ・学校支援事業「学校力向上サポートキャラバン」において、地区研修として、生徒指導校内研修パッケージの理解や進め方について学ぶコースを設定する。
- ・平成30年度生徒指導主事（小・中・高・特）研修講座や中堅教員を主な対象とした研修講座において、模擬校内研修を実施し、体験的に学ぶ機会を設ける。

(2) 校内研修パッケージⅡの構成

ア アセスメント力向上パッケージ<児童生徒理解>（以下「アセスメント力向上パッケージ」という。）

児童生徒に適切な指導・支援を行うために、的確に児童生徒を理解する力（以下「アセスメント力」という。）の向上を図ることをねらいとした。研修の流れは、まず、問題行動を何度も繰り返す子供に対して、どのように指導・支援をするかについてのグループ協議を行う。そのことを通して、問題行動を考える際、表面的な言動だけに対応した指導・支援は長期的に見たときに効果が上がりにくいいため、言動の背景にあるものを理解するアセスメント力が必要なことを共通理解する。その上で、アセスメント力を高めるポイントである「客観的理解」「共感的理解」「日頃の児童生徒理解」について学ぶ展開となっている。自校の児童生徒の事例を基に、「チーム支援シート」を活用したグループ演習を行い、問題行動の背景や要因について精緻に分析を行う。さらに、問題解決に向けての仮説を立て、グループで多角的な視点から検討した上で、具体的な指導・支援の方法を考えるという構成となっている。

イ コミュニケーション力向上パッケージ<児童生徒との信頼関係づくり>（以下「コミュニケーション力向上パッケージ」という。）

児童生徒から信頼され、よりよい関係を築くために必要な、適切に児童生徒と関わる力（以下「コミュニケーション力」という。）の向上を図ることをねらいとした。研修の流れは、まず、自らが中学生の頃、困った時に相談しようと思った先生についてのグループ協議を通して、児童生徒から信頼されるには、「子供の話を誠実に聴く」「思いや気持ちが子供に届く」という態度や姿勢、技術が重要であることを共通理解する。その上で、コミュニケーション力を高めるポイントである「聴く」「伝える」について学ぶ展開となっている。上手に聴くコツや前向きになれる伝え方のポイントを、いずれもロールプレイングやグループ協議を通して体験的に理解し、身に付けることができる構成となっている。

ウ ファシリテーション力向上パッケージ<学級（HR）集団づくりの促進>（以下「ファシリテーション力向上パッケージ」という。）

子供たちの集団での活動が円滑に行われるよう適切に働きかけ、学級（HR）集団づくりを促

進していく力（以下「ファシリテーション力」という。）の向上を図ることをねらいとした。研修の流れは、まず、子供たちを集団で活動させる際の困難な点、及びその背景や要因、日常的に行っている働きかけの工夫についてグループで協議し、集団の実態に即した適切な働きかけをすることの重要性を共通理解する。その上で、ファシリテーション力として不可欠な「集団の実態を的確に捉える」「居場所づくりと絆づくりの働きかけ」について学ぶ展開となっている。自校の学級（HR）集団を例にグループ協議を行うことにより、集団の実態に即した「居場所づくり」「絆づくり」の働きかけの具体的な方法について理解を深めることができる構成となっている。

エ 三つの力の関係性について

「基礎研修」を通して生徒指導の意義や進め方の理解を深めた上で、校内研修パッケージⅡでは、アセスメント力、コミュニケーション力、ファシリテーション力の向上を目指している。しかし、様々な生徒指導課題に対応したり、未然防止や予防的な取組を推進したりする、総合的な生徒指導力を身に付けるためには、いずれかの力が向上すればよいというものではなく、バランスよく向上させることが重要である。中でもファシリテーション力を効果的に発揮するためには、アセスメント力とコミュニケーション力を基盤に、集団を的確に把握し、信頼関係を築き、状況に応じた適切な働きかけを行うことが求められる（図4）。

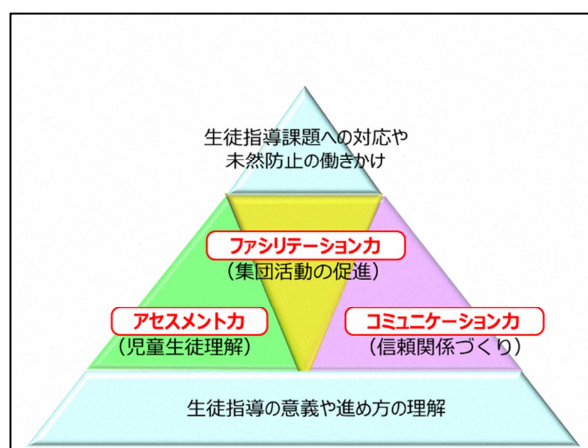


図4 バランスよく力量形成されている場合

図5、図6に示すような偏った力量形成では、生徒指導課題への対応や働きかけの幅が狭くなり、長期的に見た効果はあまり期待できない。校内研修パッケージⅡでバランスよく力量形成することで、生徒指導課題への柔軟で幅広い対応や未然防止の効果的な働きかけが期待できる。各学校において、生徒指導力の弱点を強化し、組織としての生徒指導力を向上させるツールとして、校内研修パッケージⅡを活用することが望まれる。

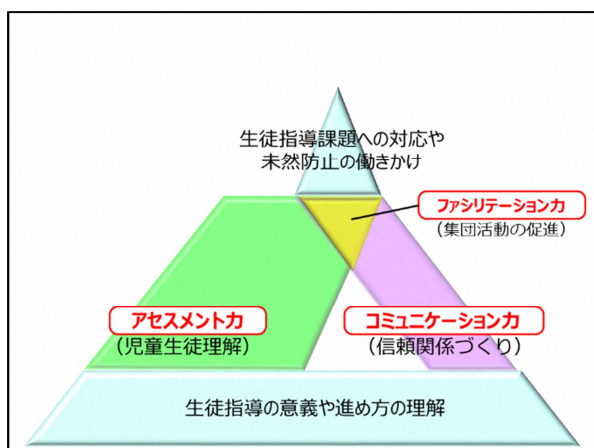


図5 コミュニケーション力の形成が弱い場合

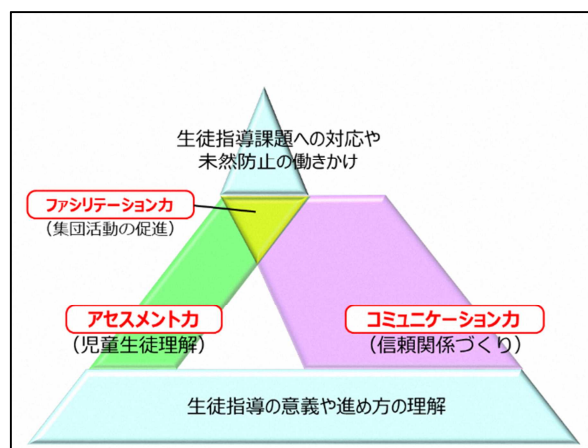


図6 アセスメント力の形成が弱い場合

3 校内研修パッケージⅡの有効性の検討

平成29年度、協力校において、校内研修パッケージⅡ（試案）を活用した校内研修を延べ22回試行した。校内研修実施後のアンケートから、校内研修パッケージⅡの有効性について検討した。調査対象者の校種別の内訳は、表4に示すとおりである。

表4 調査対象の内訳 [人]

	N	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
アセスメント力向上パッケージ	244	45	31	127	41
コミュニケーション力向上パッケージ	155	29	49	50	27
ファシリテーション力向上パッケージ	50	17	10	19	4

(1) 研修時間の適切さ

全ての研修パッケージにおいて研修時間を60分と設定したが、「ちょうどよい」の回答が、どの研修パッケージも80%を超えており、おおむね適切な研修時間であることが確認された(図7)。しかし、「話し合う時間が増えるとより実りある研修になると思う。」「グループ協議の時間が少し短かった。」などの記述も見られたことから、研修時間は60分を基本とし、各校の実態に合わせて協議の時間を長く設定するなど、柔軟に実施することが望まれる。

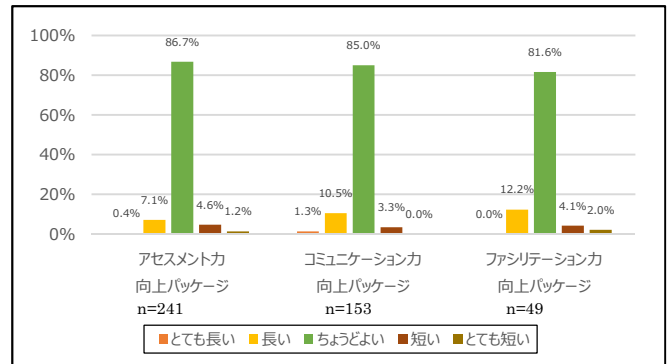


図7 研修時間(60分)の適切さ

(2) アクティブ・ラーニングの視点を生かした研修方法の評価

講義、個人思考、協議や演習を組み合わせた研修の進め方については、「とても研修しやすい」「研修しやすい」という肯定的な回答が80%を超えており、おおむね適切な研修方法であることが明らかになった(図8)。しかし、ファシリテーション力向上パッケージに関しては、「研修しにくい」「とても研修しにくい」の回答が合わせて18%あり、「話し合えるような事例をもつ人がおらず、話し合いが途中から趣旨と違う内容になってしまった。」「事例エピソードは提供者の負担が重い。」などの記述が見られた。このことから、特定の学級(HR)集団の状態を基に演習を行うことには、受講者に抵抗感があることがうかがえた。研修実施担当者は特定の学級(HR)の問題にとどめず、学校全体の問題として研修できるよう参加者に共通理解を図っておく必要があると思われる。

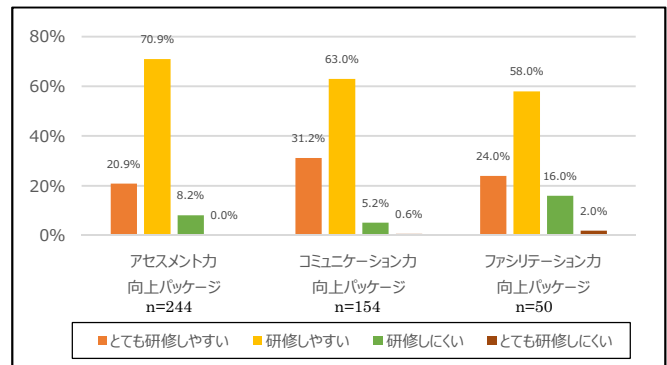


図8 研修の進め方

(3) 研修内容の理解度

研修内容の理解度についても、「とても理解しやすい」「理解しやすい」という肯定的な回答が80%を超えており、おおむね受講者の理解を得やすい内容であることが確認された(図9)。しかし、ファシリテーション力向上パッケージに関しては、「理解しにくい」という回答が14%あり、「集団の成熟段階の捉え方が分からない。」

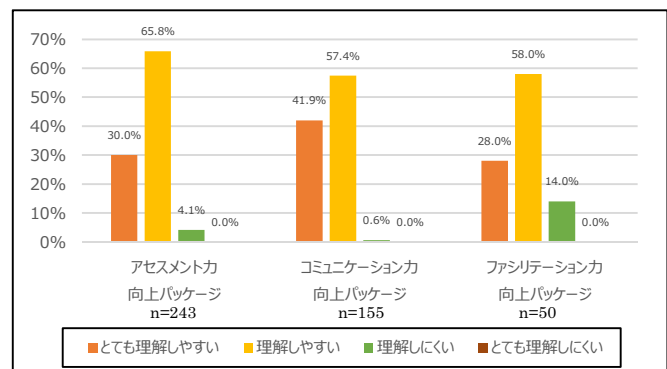


図9 研修内容の理解度

「ファシリテーション力についての定義が少し分かりにくかった。」等の記述が見られた。「集団の成熟段階」「ファシリテーション力」等、聞き慣れない用語が理解されないまま、協議や演習が行われることがないよう、丁寧に例を示しながら説明する必要があると思われる。

(4) 有効に活用するための実施時期

校内研修パッケージⅡの実施時期は、年度当初から夏季休業中が望ましいという回答が多く（図10）、これは校内研修パッケージⅠの開発時に行った結果とほぼ同じであった。できるだけ早い時期に全教職員で生徒指導の方針や児童生徒への指導・支援の方法を共通理解して、一人一人の力量を向上せるとともに、組織的な生徒指導を行うための基盤を築くことの必要性が示されたものと考えられる。

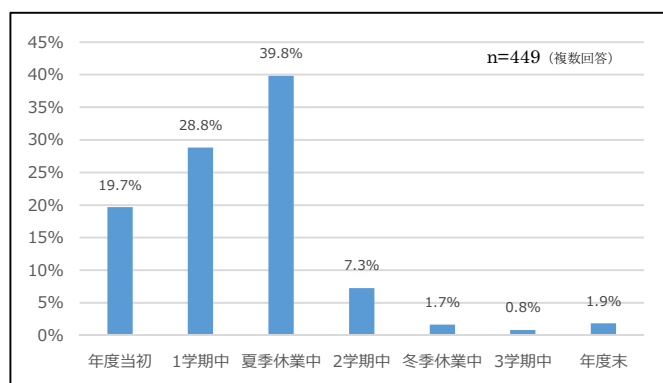


図10 校内研修パッケージⅡの実施時期

IV 研究の成果と今後の課題

校内研修パッケージⅡ（試案）を活用した校内研修を実施した協力校には、研修実施から1か月後の受講者の児童生徒への関わり方と児童生徒の様子の変化について、自由記述によるアンケート調査を行った。調査対象者の校種別の内訳は、表5に示すとおりである。

表5 調査対象の内訳 [人]

	N	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
アセスメント力向上パッケージ	149	36	13	48	52
コミュニケーション力向上パッケージ	69	12	17	24	16
ファシリテーション力向上パッケージ	10	6	0	0	4

1 校内研修パッケージⅡ実施1か月後の「生徒指導状況」の変化

※（校種、教職経験年数）

(1) アセスメント力向上パッケージ

- ・子供たちの言動だけでなく、その背景についても必ず考えるようにしている。〈小、26年以上〉
- ・言動にとらわれることなく、子供の思いや、家庭の状況など、様々な背景を念頭に置いて対応するよう心がけている。〈小、26年以上〉
- ・生徒の何気ない一言も、「何か理由があるのかもしれない」と気にかけるようになった。〈中、11～15年〉
- ・生徒の気持ちを受け止めることを第一に考えて接したところ、生徒が落ち着いてきた。〈特、16～20年〉

(2) コミュニケーション力向上パッケージ

- ・共感的理解を意識しながら児童に接するようにしている。よさを認め、頑張りをほめるように気を付けると、児童もやる気をもって物事に取り組めるようになった。〈小、26年以上〉
- ・ほめる時、叱る時の声かけの方法などを意識するようになった（YouメッセージからIメッセージへ）。〈中、26年以上〉
- ・生徒と目線を同じにして話を聴き、まずは生徒の伝えたいことを受け止めることを心がけた結果、不満をぶつけてきていた生徒が、こちらの思いを理解してくれた。〈高、6～10年〉

- ・忙しくても生徒の訴えを丁寧に聴き取るように心がけるようになった。傾聴を心がけることで、生徒の主訴を引き出すことが容易になったような気がする。〈特、21～25年〉
- (3) ファシリテーション力向上パッケージ
- ・様々な場面で「〇〇係」と担当を決め、児童が中心となって活動を進めていくことができるようにしている。少しずつではあるが、自分の役割を考えて声をかけ合ったり、話し合いをしたりするなど、児童が主体的に動く姿が増えてきた。〈小、5年以下〉
 - ・一人の子供の喜びや頑張りを、周囲の子供にも紹介し、一緒に喜ぶ機会をもつようにしている。〈小、26年以上〉
 - ・宿泊学習の事前学習では、リーダーを中心に話し合えるように、手順表や道具を準備した。自分たちで話し合って役割を決めることができるようになってきている。〈特、5年以下〉
 - ・休憩時間は、外に出て小集団で遊べる活動を行い、少しずつ教師が離れて、生徒同士で遊ぶことができるように取り組んでいる。〈特、5年以下〉

以上の記述から、研修パッケージを活用した校内研修実施後も、多くの教職員が研修から得たことを実践することを心がけ、児童生徒への関わりに生かしていることが分かった。そのことにより、児童生徒と良好な関係性が生まれ、児童生徒に好ましい変容が見られたりしていることがうかがえる。ベテランも若手も自身の生徒指導を振り返り、次の指導・支援につなげていく姿勢につながったことは、大きな成果と捉えることができる。

2 校内研修パッケージⅡ実施1か月後の「生徒指導体制」の変化 ※〈校種、教職経験年数〉

児童生徒に対してチームで指導・支援に当たっていることがうかがえる記述が複数見られた。

- ・子供たちの言動の陰に隠れている様々な要因について、多くの教職員の考えを考慮しながら児童理解をするようになってきた。また、日常の小さな情報でも報告・連絡・相談をきちんと行い、共通理解のもと、支援に当たるようになった。〈小、26年以上〉
- ・学年団の先生方と、一人一人の生徒についての理解や気付きを共有した上で指導している。〈高、26年以上〉
- ・チーム学校として動くことが、生徒に非常に有益で個性の伸長につながるということを意識して、できるだけ多くの先生方と意見、情報の交換、共有をすることを心がけている。〈高、26年以上〉
- ・先生方と相談し、見守る場面、声かけが必要な場面等を判断し、支援を行うようにしている。〈特、26年以上〉
- ・生徒のよい行いを見つけた時は、その場で認める声かけをし、該当生徒の学年団の先生方に報告するようにしている。〈中、21～25年〉

以上の記述から、どの研修パッケージも、グループ協議や演習など、教職員同士の交流を通じて学ぶ展開を多く取り入れたことにより、研修を通して同僚性が高まり、児童生徒や学級（HR）集団についての相談や情報交換をしやすい職場の風土が生まれてきたと捉えることができる。校内研修における学び合いは、教職員一人一人の生徒指導力の向上にとどまらず、学校としての生徒指導の組織的な取組の充実にも効果があると考えられる。

3 生徒指導校内研修パッケージの効果的活用に向けて

これまで開発してきた研修パッケージが八つあり、それぞれに異なる目標や特徴があることを考えると、活用する研修パッケージの組み合わせ方と時期によって、効果が大きく違ってくると思われる。そこで、次に、学校の実態に合わせた研修パッケージの組み合わせ方と校内研修の実施時期の例（表6、表7）、及び考えられる実施形態を示す。

(1) 活用する研修パッケージの組み合わせ方と実施時期

表6 予防的・開発的生徒指導に取り組みたい学校の実施例

1年目			2年目			3年目以降は、 1年目(①～③) 2年目(④～⑥) の研修を交互に 繰り返す。
①	②	③	④	⑤	⑥	
年度当初 始業式前	年度当初 4月中	夏季休業中	年度当初 始業式前	年度当初 4月中	夏季休業中	
基礎研修	方法研修	課題別研修	基礎研修	方法研修	課題別研修	
「基礎」 パッケージ	自校の教職員の 実態に合った 研修パッケージ	自校の生徒指導 課題に合った 研修パッケージ	「進め方」 パッケージ	自校の教職員の 実態に合った 研修パッケージ	自校の生徒指導 課題に合った 研修パッケージ	

表7 自校の生徒指導課題の解決から取り組みたい学校の実施例

3回実施例			2回実施例		
①	②	③	①	②	③
年度当初 始業式前	1学期中	夏季休業中	年度当初 始業式前	②までに	夏季休業中
課題別研修	基礎研修	方法研修	課題別研修	基礎研修	方法研修
自校の生徒指導 課題に合った研 修パッケージ	自校の教職員の 実態に合った研 修パッケージ	自校の教職員の 実態に合った研 修パッケージ	自校の生徒指導 課題に合った研 修パッケージ	自校の教職員の 実態に合った研 修パッケージの スライド資料(説明 原稿)を印刷配付し、 読んでおく ことを指示する。	自校の教職員の 実態に合った研 修パッケージ

(2) 実施形態の例

- ア 全教職員対象研修
- イ 学年団、学部、学科別研修(大規模校等)
- ウ 若手対象研修

※経験年数別研修講座対象者の場合、校内研修の実実施時数としてカウントすることができる。

4 生徒指導校内研修パッケージの課題

研修パッケージは、校内研修に必要なスライド資料やワークシート、進行用のシナリオ原稿等がセットになっており、「これを使えば、すぐに校内研修を始められる。」という利点がある。一方で、「研修パッケージの丁寧な作りが、学校が研修パッケージに頼り切る状態を生み出し、主体的な学びをそぎ取ってしまうのではないか。」という懸念もある。ゆえに、研修パッケージに、自校の実態に合わせてアレンジして使うことのできる部分を盛り込んでいく必要があると考えられる。「2回目からの研修には、自校の実態に合わせて、アレンジして使っていく。」というように、各学校の主体性が生かされ、進化する研修パッケージとなることを期待する。そうなることではじめて、研修が、教職員一人一人の力量向上、学校の組織力向上につながっていくものになると思われる。

V おわりに

平成29年3月に公示された新学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の重要性が示された。この授業改善は、決して教科学習の範ちゅうだけで考えることではない。『生徒指導提要』では、学習指導における生徒指導について、「各教科等の学習において、一人一人の児童生徒が、そのねらいの達成に向けて意欲的に学習に取り組めるよう、一人一人を生かした創意工夫ある指導を行うこと」³⁾と指摘されている。今後、授業の中に、知識や思考力を育て学力を高めるだけでなく、個性を伸ばし社会性を育むといった生徒指導の機能を意識的に

内在化していくことが重要になってくるであろう。ゆえに、あらためて「生徒指導とは何なのか」「生徒指導の機能をどう働かせるのか」ということを考えていくことが求められる。このことを一人一人の教職員が自覚し、研修を通じて同僚性を高め、組織的な生徒指導の動きができるようにしていくという観点からも、生徒指導校内研修パッケージがもつ意義は大きいと考えられる。

教員の専門性の核は、教科の指導内容をどのように教え、どのように子供たちの学びをつくっていくか、にあると言える。しかし、授業の中に生徒指導の機能が内在していることを考えると、授業の内外で生徒指導を進めていくこともまた、教員の重要な専門性である。専門性を高めるためには、自らの教育実践を振り返り、それがもっている意味、成功や失敗の要因、効果的だった点等を分析し、得られた気付きや教訓から実践を修正し、次の実践につなげていく「省察」が不可欠である。さらには、この省察を教員が個別に行っていくだけでなく、組織（集団）で行っていくことが重要である。

学校は、授業研究という括りの中で、授業を組織的に省察することはできているが、生徒指導を組織的に省察することは十分にできているとは言えない。例えば、生徒指導に関する問題が起きた際、ケース会議を開くということが、組織的な省察をもたらしていると考えられるが、多忙化の中でそのような機会も十分にもつことができない状況に置かれている。近年、問題行動等の背景が非常に複雑になっており、児童生徒にどう働きかけていけばよいのかを見出すことが困難になっている。これまでの経験や勘を基にした指導・支援や、生徒指導に長けた個人の教員に頼った指導で解決できる生徒指導課題は限られてきている。ゆえに、今後、学校外の専門家力も活用しながら、学校はチームとして生徒指導を進めていく方向にあるが、その前提となる教員自身の専門性を高める、生徒指導に関する組織的な省察を行うことが必要となると考えられる。組織的な省察こそが、学校を、得られた気付きや教訓を組織全体の学びとして次の実践に生かすことのできる「学習する組織」（Learning Organization）にしていくものに他ならないであろう。開発した生徒指導校内研修パッケージを柔軟に活用することで、学校が組織として主体的に省察を進め、具体的な生徒指導課題に取り組むことで日々進化する組織になっていくことを願っている。

○引用文献

- 1) 文部科学省（2010）『生徒指導提要』 p. 1
- 2) 文部科学省（2010）『生徒指導提要』 p. 40
- 3) 文部科学省（2010）『生徒指導提要』 p. 6

○参考文献

- ・ 文部科学省（2010）『生徒指導提要』
- ・ 新井肇（2011）『事例・データから学ぶ 現場で役立つ生徒指導実践プログラム』学事出版
- ・ 岡山県総合教育センター（2015）『「不登校やいじめ、暴力行為等を生まないための学校づくりに関わる校内研修パッケージの開発」に関する調査研究』
- ・ 日本生徒指導学会（2015）『現代生徒指導論』学事出版
- ・ 兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻（教職大学院）生徒指導実践開発コース（2017）『これからの生徒指導の方向性と課題ー包括的児童生徒支援の視点からー』
- ・ 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説』
- ・ 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説』

平成28・29年度岡山県総合教育センター所員研究（共同研究；生徒指導）
「不登校いじめ、暴力行為等を生まないための学校づくりに関わる校内研修パッケージの開発Ⅱ」
研究委員会

指導助言者

新井 肇 関西外国語大学教授

協力委員

平松 高志 総社市教育委員会学校教育課指導主幹（平成28年度）
（現 岡山教育事務所義務教育支援課指導主事（主幹））

村山 俊 総社市教育委員会学校教育課指導主幹（平成29年度）

協力校

玉野市立築港小学校	新見市立塩城小学校
新見市立西方小学校	瀬戸内市立行幸小学校
井原市立芳井中学校	鏡野町立鏡野中学校
岡山県立津山工業高等学校	岡山県立瀬戸高等学校
岡山県立岡山南支援学校	岡山県立誕生寺支援学校

研究委員

大谷 創一 岡山県総合教育センター生徒指導部長（平成28年度）
（現 岡山県立備前緑陽高等学校教頭）

高山 公彦 岡山県総合教育センター生徒指導部長（平成29年度）

定久 照美 岡山県総合教育センター特別支援教育部指導主事（平成28年度）
（現 岡山県健康の森学園支援学校高等部教頭）

小賀 暁美 岡山県総合教育センター教育経営部指導主事

赤木陽一郎 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事

小林 寛 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事

松田 典子 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事（平成28年度）
（現 津山市立河辺小学校養護教諭）

万代 ユミ 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事（平成28年度）
（現 岡山県教育庁義務教育課生徒指導推進室指導主事（主任））

小田 哲也 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事（平成29年度）

松浦 孝昭 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事

青木裕一郎 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事

山根 亮 岡山県総合教育センター特別支援教育部指導主事（平成29年度）

石原 亜純 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事（平成29年度）

中舗 桂子 岡山県総合教育センター生徒指導部指導主事

平成30年2月発行

岡山県総合教育センター 研究紀要 第11号

研究番号17-04

不登校やいじめ、暴力行為等を生まないための
学校づくりに関わる校内研修パッケージの開発Ⅱ

編集兼発行所 岡山県総合教育センター

〒716-1241 岡山県加賀郡吉備中央町吉川 7545-11

TEL (0866)56-9101 FAX (0866)56-9121

URL <http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/>

E-MAIL kyoikuse@pref.okayama.lg.jp

Copyright© 2018 Okayama Prefectural Education Center